
School Days on Rail ~みんな乗る気です！

静岡運転所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

School Days on Rail ～みんな乗る気です！

【著者名】

NCT-ア

N68332Q

【作者名】

静岡運転所

【あらすじ】

鉄道が近くを通りていなくても、学校や家にいても、鉄道研究部「鉄研部はちゃんと活動してるんです！重度の鉄道好き『テツ』である広裕を始めとする鉄研部員の日常を描いた短編集。

第一講 めやねの超混沌×ケイアーテイク ターミナル講座（前書き）

「」のシリーズは、

- ・拙作「みんな乗る気です！」の番外編です。
- ・旅メインの本編とは趣が異なり、学校と家の話がメインです。
- ・基本的に一話完結型です。
- ・単作として読める仕様になっていますが、本編読後に読むことをお勧めします。
- ・それではまたしてもゆっくらしていってねーー！

第一講 あやねの超混沌×ケイアーテイク ターミナル講座

第一講 あやねの超混沌ターミナル講座 ケイアーテイク

四月も既に半分が過ぎ、あれほど咲いていた桜もすっかり葉桜になつていました。

放課後、クラスを離れた私、仙崎あやねは慣れた足取りで部室に向かっていました。

私が入っている部活は鉄道研究部。若干六名ながら、月に一度旅に出る部活です。旅に出るのが大好きな私にとってまさにうってつけの部活に思えたのです。もちろん私は旅が好きだけで、鉄道には興味のきの字もありませんでしたが、そして問題ないだらう 何も知らなかつた私はそう高をくくつていたのです。

おりしも、部長の那智先輩からそろそろ例の旅行（研修旅行というそうですが）に行くという旨の話を聞いた翌日でした。否応なしに私のテンションは上がっていました。軽やかなステップを踏む私は、まだ鉄研部の深さに気づいてはいなかつたのです。

部室は校舎から少し離れた部室棟にあります。コンクリートでできたこの建物には鉄研部を始め小さな文化部系の部活が入居しています。鉄研部の部室はその二階の一一番突き当たりにあります。どの部室もドアから何から基本デザインは同じで、鉄研部の場合ドアに掲げられた『関係者以外立入禁止』のプレートくらいしか違いがありません。

ドアを開けようとすると先輩たちの話し声が聞こえてきました。四人いる先輩たちは揃つて熱心で、大抵私が行く前に集っています。だから気にも留めなかつたのですが……

恐る恐るドアを開けると、

「だから東京が一番だつて！」

「そうでもないぞ。終着の本数はそんなわけだし。もつとも、新宿は通り過ぎるのばつかだけど」

「それはJRだけの話でしょ。小田急とかいれれば……」

部室の中央を占有するテーブルには三人の先輩がいました。その三人が今、私の眼前で喧々諤々の議論を繰り広げていました。滑河先輩の言葉でからうじて鉄道の話らしいということはわかりましたが、それ以外はさっぱりです。

「天下の東海道本線だつて東京が始発だし……あ、あやねちゃんだ」「それを言うなら新宿だつてありでしょ……あら、こんにちは」「残念ながら櫛形ホームがない時点では……お、こんちは」茫然自失として固まる私に先輩たちが気づかって声をくれます。しかし目の前の会話が全く、全く！ 理解できず、私の頭はパンク状態を迎えていました。

「あの……先輩、なにを語つてたんですか」

だから私の口からこんな質問がついて出ました。

「ああ、今ね、東京のターミナルはどこかつて話をしてたんだよ」「子供をあやすようにそう言つるのは部長の那智広裕先輩です。女子が多いこの部活で、男子の先輩としては唯一の存在です。私に対して子供扱いなのを除けば普通にいい先輩です。

ただ、この先輩、かなり重度の鉄オタなんです。口を開けば半分は鉄道の話をしだします。

「正確には『東京のターミナル駅を一つ挙げる』といわれたらどうか、だけど」

どこか落ち着いた口調の滑河時子先輩。窓から吹き込む春風に長い黒髪が舞っています。顔に浮かぶ妖艶な笑みといい、メリハリのある細い体躯^{フルム}といい、とても一つ上の先輩とは思えません。那智先輩には失礼ですが、滑河先輩の方がまだ普通に話す余地があります。

「あ、ところであやねちゃんはどこが一番だと思う？」

氣さくに北浜結那先輩が尋ねてきます。那智先輩より頭一個分小さい先輩ですが（そんな私は北浜先輩より拳一つ分は小さいですけど）

、胸元では一つの膨らみがブラウスをはつきり押し上げています。同じ女としては羨ましい限りです。……自分と比較したらなんだか泣けてきました。ぐすん。

那智先輩と幼馴染みというのは伊達ではなく、なんとなく私の扱いも似てる気がします。というか私に話を振られても。ええっと、ターミナルってなんだろう。とりあえず東京の有名どころの駅を挙げればいいのかな……鉄道がよくわからない私ですが、旅でよく東京に寄る関係で山手線の駅ぐらいならわかります。

わずかな知識を元に私が見つけた答えは、

「えっと、品川……？」

確かに結構な数の路線に乗り換えられた気がしたのですが……はあ、と那智先輩が嘆息を漏らしました。

「そつか、品川か……上市と一緒か……」

上市、とは今ここにいない上市董先輩のことでしょう。こちらもモデルに負けないほどの体形です。^{アロボーション}どうも美少女揃いなんでしょう。起伏のない私では勝負になりません。この世に神様がいるんだとしたら神の御業というのは意図的に差別を作り出すことなのかもしません。

それはさておき。

「うーん、確かに東海道本線の車庫があるからあながち否定できな
いけど……」

「田町電車区のことか。でも……」終着駅つて感じがしないよ
な

「そうね。どうしても途中駅の感じがするわ」

私が世の矛盾に打ちひしがれていた間に先輩たちの会話は元通り、私のわからない方向へと進んでいました。

「それを言つたら新宿も一緒に気がするけどなあ……JRが基本的に素通りだし」

「あり、東京だって京葉線ぐらいしか終点らしい路線がない気がするけど? 東海道線にしたつて今度東北縦貫線ができれば終点じゃ

なくなるわけだし」

「そつちあんま氣にしてないし。なんたつてこつちあは新幹線の終^タ
着駅^{ターミナル}だからね」

「結那、その汗はどうしたの？ まさか冷や汗？」

「うぐつ……それは……それを言つたら新宿止まりの路線つて何があるの？」

「ふふ、京王と小田急を忘れてほしくないわ。あと西武も」

「なにそれおいしいの？」

「スルー！？」

「おい、おまえら落ち着け。両国を忘れてもうつては困……」

「「それはないわ」」

「話を聞いてもらつ云々以前の問題！？」

両国と聞いて相撲を思い浮かべる私には話を聞く云々以前の問題です。

「……そもそもターミナルの定義つてなんだ？」

那智先輩が今更なことを言い出しました。むしろ私が聞きたいです。

「それは……あれ、なんだうつ

「言われてみるとそうね……」

どうやら先輩たちは「ターミナル」の語感^{「コアンス}だけで話をしていたようです。むしろそれで会話が成り立つのだから恐ろしい限りですが。必然的に話はターミナルの定義に移ります。

「終着駅^{ターミナル}というからには始発とか終着列車が多くないと」

「待つて、それなりの規模と路線が通つていればターミナルといえるんじやないかしら」

「やはりターミナルの象徴は櫛形ホームだな。異論は認めない」

定義まで三者三様です。

「那智君の言い分だと品川も東京もアウトつてことなの？」

「ちよつと広裕！ どういふこと！？」

「どうもなにも、JRだらうと私鉄だらうとターミナルに付き物だろ？ 東急の渋谷とか小田急の新宿とか、……うちの近くだと豊橋の

飯田線ホームとかがそう「

「どつちにしる、私に喧嘩売つてない！？」

「そもそも両国つて櫛形ホームあつた？」

「何を今更。元々総武本線の終着だつたからな。東京直通の快速線がてきて半分潰したけど今も新聞のやつに使つてるし」

「新聞？……ああ、新聞列車のことね

「なにそれ？」

「結那知らないの！？ あの北浜武志たけしの娘なのに！？」

「お父さんは関係ないでしょ！？」

？？？……あのつて……？

「ああ、結那のお父さんは有名な鉄道研究家なのよ」当惑している私に滑河先輩が手を差し延べてくれました。が、生憎わけがわからないます。

「新聞列車つてのは幕張の113系を使つた変わり種でだな、文字通り新聞を載せるんだよ。朝つぱらに両国を4ヨン + 4ヨンで出て、千葉に着いたら切り離して館山行きと安房鴨川行きの定期列車にそれぞれ連結。途中で新聞つみにを降ろしつつ辰前には千葉の裏側まで新聞が届くつて寸法だ」

「辰前に……つて結構遅くない？ 必要性あるの？」

「結那から必要性という単語を耳にするとは思つてなかつた……それはそうと、うーん……正直なんで残つてるのかはわかんないけど、郵便荷物車の名残だと思つんだけどね。ほら、まだ房総半島がディーゼルだった頃の

……那智先輩はいつの時代の人なんでしょう。

「滑河さんも千葉から來たからもちろんわかるよね」

転校生の滑河先輩は早くもここ新豊学園のアイドル的存になつてます。だつて、非の打ち所がないんですから。転校初日、つまり私たちの入学式の日（この学校では始業式と入学式の日が同じです）に百人ばかりの男子が玉碎した話は、桜の散つた今でも語り種になつています。千葉から來た、というのは初耳ですが。

「もちろん。生で見たこともあるわ。あ、よかつたら写真あるけど持つてくれる？」

「是非とも……というわけで両国には櫛形ホームがあるんですうー。あなたとは違うんですうー」

「その言い方はうざい」

「…さすがに調子に乗りすぎじゃないかしら」

「言い返す言葉もございません……」

さすが、巷で『一鉄道に人生を捨てた男』『A Life on to the rail』と離されるだけはあります。鉄道のことになると人格崩壊するという噂は確かにあります。

「ええっと、何の話だっけ……ああ、ターミナルの話か」

「でも両国がターミナルだつたのは電化前まででしょ？」

「千葉方面は両国の独壇場だつたんだぞ？『内房』『外房』『犬吠』『あやめ』『水郷』……まだ挙げようか？」

「だから過去の栄華に縋つてるだけじゃないつて言つてるの！今なんて快速も止まらない一途中駅のくせに」

「止まらないじゃなくて止まれないなー！新宿なんか中央線とライナー以外は素通りのくせに」『伊達に一日の乗降客数世界一の看板を掲げてないわ。ギネスブックにあるし……あら、そういえば新宿は乗り入れる路線では絶対に負けないわね。山手線に中央快速に中央総武緩行線に埼京線に湘南新宿ライン、メトロは丸の内線に都営新宿大江戸、京王、小田急、西武……これで全部？あと列車名で行くと』

「うーん、俺的には結節点の意味じゃなくて終着駅の意味で理解してたんだがな……もつともどっちの意味でも中途半端な東京は論外だけどな」

「広裕！ それどういう意味！？ 私に喧嘩売つてるの！？」

「おやおや結那さん、それは一種の敗北宣言として受けとつてよろしいんで？」

「冗談じゃないわよ！… と云うか東京でターミナルといつたら普^いつぱんじん

通の人は東京を思い浮かべるでしょ！！」

「待つて、その言葉は聞き捨てならないわ。貴禄なら断然新宿でしょ！」

「貴禄なら両国が一番だろ！」

「広裕！ いつまでも昔にしがみつかない！！」

「結那こそ昔を振り返るんだな！」

目の前で繰り広げられる弾丸がごとき応酬に、私にはなす術すべがありません。互いを貶めあつてるようにしか見えないのですが。駅の話なのか個人の話なのか。

その時でした。

ガチャリ。ドアノブの音に部室が静まり返りました。那智先輩も、北浜先輩も、滑河先輩も、そして私もがドアの向こうの存在に息を呑みます。

「ここにちは…… つて先輩方どうされました？ …… もしかして、僕の顔に何かついてます？」

ドアの向こうから現れた東郷君ひがいんとうか もう一人の一年生部員の東郷崇平君ひがいんとうへい の姿に、全員の視線が集まります。

いつになく張り詰めた空気。言葉を発するのも躊躇われる中、那智先輩が動きました。

「あ、ちょうどいいとこに来た。崇平君、東京のターミナルで一番はどこだと思う？ ちなみに櫛形ホームがないとアウトな」

「そうそう、昔じゃなくて今で考えて」

「それなりの路線と本数もあるといいわね」

「え……ええつ！？」

私と違つて鉄道好き（鉄道好きの仲間内ではテツというそうですが）の東郷君ですが、いきなりの質問に戸惑っています。なにげに先輩たちが条件をつけてますし。無茶振りにも程があります。入り口で固まる東郷君に刺さる先輩たちの目線がさらに獣じみてきました。東京か新宿か両国か（あるいは品川か）で揉めているようなので、東郷君の答え次第では火に爆薬を放り込む結果にもなりかねません。

それだけに東郷君の次の一声に注目が集まつてゐるのです。

「ええつと、僕は上野が一番だと思うんですけど……」

沈黙 先程と同じ緊張に満ちていますが、なぜか先輩たちは皆呆けた顔をしています。どうしたんでしょうか……と、突然、ガタリと音がして先輩たちは同時に立ち上がりました。そして東郷君を指差して、

「「「それだ（それよ）……」」

……えーっと、全く合点がいかないんですけど?

「さすが慶平君……俺達の条件を全部満たしていやがる……」

「正直言つて上野は盲点だったわあ……」

「変に固執してたのが悪かったのね……」

先輩たちはうなだれて謎の反省モードに入つてゐます。何がなんだかさっぱりです。

ふと、入り口に突つ立つていた東郷君と目があいました。

「えつと……何が起きてるの？」

むしろ私が聞きたいんだけど。

こうして先輩たちの白熱した議論は終息を迎えたのでした。収穫は先輩たちの鉄道に対する並々ならぬ思い入れを感じられたことでしょうか。うわべじやない、本物の熱い思いを。私でもわかるくらいの、純粹な情熱を。

もつとも、この一日後の旅行で、先輩たちの深い鉄道愛を直に感じる気になるのですが、それは別の話と云つことで。

第一講 あやねの超混沌×ケイアーテイク ターミナル講座（後書き）

この先はネタバレを含みます

タイトルの ケイアーテイク chaotic 混沌の

chaos（英語ではケイアス、慣用的にはカオス）の形容詞形です。

一般人から鉄道研究部＝鉄研部の面々を見たらどうなるか、というコンセプトで書きました。読んだ方はわかると思いますが、広裕始めメインキャラたちが本編と違つて自制していないので、文字通り ケイアーテイク chaotic な展開となつております。ちなみに東京のターミナルは上野派です。もしも『お前それはないだろ』『ふん、小僧が調子にのりおつて。頭が高いわ』等意見がございましたらどうぞお寄せください。徹底的に叩きのめしてやるんだから！

短編は主人公以外にも花を持たせたいので、次回は結那がメインの話になると思います。それでは次のお話で！

第一講 結那の大乱闘『バトルチック』三分クッキング講座（前書き）

おまたせしました。今日は結那を中心としたお料理教室です。今回
鉄道ネタは一切ありませんのでご安心を。思い切って台詞だけで構
成してみました。「」の前は名前です。出てくる名前がわからない
人は本編（＝「みんな乗る気です！」）を見たり本編を見たり本編
を見たりするといいと思います。それではどうぞ。

第二講 結那の大乱闘《バトルチック》三分クッキング講座

第二講 結那の大乱闘《バトルチック》三分クッキング講座

結那「はい！ 今日も『結那のテキパキ！クッキング』の時間がやつてまいりましたー！」

広裕「いやいやいやいや、ちょっと待て」

結那「何？」

広裕「なんで料理教室みたいな出だしなわけ？」

董「細けえこたあいいんだよ！」

広裕「よくねえよ！」

結那「ほらほら喧嘩しないの」

部活の良心が……」

結那「時子は家の用事で遅れてくるつてさ。たあ、それじゃあ始めますか。えー、司会は私、北浜結那と！」

広裕「まだそのスタイル？……えーっと、那智広裕と」

董「上市董、でお送りします！ あ、ちなみに『は』は『キラッ』

『 つて 読んでね』

広裕「そのはどう読めばいいんだよ！」

結那「さ、今日も元気に張り切つていこーーつー！」

董「おーっ！」

広裕「無視かよ！」

結那「今日は広裕でも作れる『ご飯から作る簡単炒飯』でーす」

広裕「失礼な」

結那「なにが」

広裕「俺だつて炒飯ぐらい作れるよ」

結那「……えつ」

董「えつ」

広裕「えつ」

結那「……冗談は置いといて」

広裕「さすがに俺でも炒飯はできるわ」

結那「じゃあ、はい」

広裕「？」

結那「さつたと三分で作つて」

広裕「さ、三分！？」

結那「出来ないの？」

広裕「じ、十分ならともかく三分は無理があるだろ……」

董「と！ いうわけで！」

結那「早速作つていきましょー！」

広裕「え、今は何だつたの？」

結那「空氣読んでよ広裕！」

広裕「わ、ちょっと、叩くのはやめろ！」

董「はいカツトー」カンカンカンッ！

広裕「……なんでお前力チンコ持つてるんだ？」

董「気にしたら負け負け。さあ、テイク^ツいくよー！」

広裕「えつ、えつ……えつ？」

結那「はい！ 今日も『結那のテキパキ！ クッキング』の時間がやつてまいりましたー！」

広裕「いやいやいやいや、ちょっと待て」

結那「今度は何？」

広裕「なんで料理教室みたいな出だしなんだ？」

結那「気分」

広裕「……（田玉が吹つ飛ぶ）」

董「あつ、那智くん……ほら、田玉田玉」

広裕「おう、すまない……よし装着、じゃねえよー！」

董「にしし、ばれたか」

結那「……」

広裕「ほら、結那も待つてたしかったやるが。元はといえればお前

のための料理教室なんだから」

董「そーですね！」

広裕「いい〇もじやないんだから……」

結那「……私にはあんな優しくしてくれないのに……」

広裕「ん、なんか言つたか？」

結那「う、うるさいつ！」

広裕「『』ふつ！？」

結那、鳩尾みぞおちに正拳突きはきつこ

董「そこのお一人さん。いちやつのはそこまでにして」

結那「い、いちやつ……！？」

広裕「正拳突きはいちやつに入るのか……？」

結那「……と、とにかく！ さつさと作るよー！」

広裕「お、おう……して、材料は？」

結那「とりあえず『』飯

広裕「米のない炒飯つてただの炒め物だわ」

結那「後は適當」

広裕「アドバイス指示適當だなおい！」

結那「一応一番ポピュラーな具は揃えたけど」

広裕「どれどれ、卵に長葱にチャーシューか。シンプルだな」

結那「シンプル・イズ・ザ・ベストなの！」

董「で、これはみじん切りにするの？」

結那「そうそう」

董「……」

広裕「待て、なぜ無言で長葱を俺に押し付ける」

董「泣くよ！？ 私泣くよ！？」

広裕「玉葱じゃないからそんなことねえよ！— てか長葱ぐらいで泣くなよ！ みじん切りにするだけじゃないか！」

董「か弱い乙女に何させる気！？」

広裕「俺に包丁の切つ先を向けて脅しといてどいが『か弱い』だよ

！ いいからさつさと刻む！—」

結那「私も手伝うから大丈夫だつて」

董「……わかった」

結那「まずは長葱を輪切りにするといひから……いつまつと董一？」

董「ん？」

結那「長葱を手で押さえて！ 長葱が転がるって！」

董「え、 だつて手を切つたら怖いじゃん……押さえればいいわけ？」

結那「分かつてくれれば……ちょつ、ストップ……手の平で押さえちゃ駄目だつて！」

董「だつて押さえろつて言つから……」

広裕「それだと一緒に手もスパツ！ だぞおー！ 猫の手だよね。

こ・の・て！ ……まさか猫の手も知りんとかいうなよな

董「……」

広裕「団星かよー」

結那「……『ごめん。 料理を教える^{せんせー}やがじやなかつた

ピンポーン。

広裕「ん？ 誰だ？」

結那「誰だろ……とりあえずあたし出でへる

広裕「お前の家なんだから俺とが出たらむしろびっくりだろ……」

つちは気にするな

結那「わかつた」

広裕「……さて、 料理講師の結那がいなくなつたから……なにやつてんだ上市」

董「猫の手…… 猫の手……」

広裕「おい、 なつてねえぞ」

董「え、 ちょつ、 えつ？」

広裕「ほら、 猫の手はこつやつて爪をほぼ垂直に立ててだな、」

結那「急に呼んでごめんね？ ほら、 広裕と董も……」

時子「董に料理を教える、 だつた？ 私もあんまりできない……け

ど……」

広裕「お、 滑河さん。 いらっしゃい

時子「……えーっと、1、1、0、っと」

広裕「待て！俺が何をした！」

結那「それ私の台詞！なんで董に腋から腕を回してんの広裕！…」

広裕「ん？ああ、これは猫の手を教えるためにだな」

結那「いいから離れる！」

広裕「ちよつ、やつ、やめろ！いつちは包丁持つてんだぞ…」

董「ぐすん」

結那「広裕！なに女子を泣かせてるの！？早く離れなさい！」

広裕「なにその俺が悪いみたいな つてちよつ、ホールド禁止！お願いだから、お願いだから、せめて包丁は置かせてくれ！」

結那「それでも離れないなら……えいつ」

広裕「まさかの抱きつき作戦！？しかも堅い！？は、離せ…ま
ずは包丁を置かせ！」

結那「駄目。広裕が離れない限り離さないからね！」

広裕「密着してて身じろぎ一つできないんだけど…？上市 じ
ゃなくとも誰でもいいから、ヘルプ！ヘルプ・ミー…」

董「……なにこのバカップル」

結那・広裕『カッフル言つな…』

董「あ、そこは全力で否定するといろなの……といつか私を挟んで
揉めないでほしいんだけど…苦しい…」

三分後

広裕「……つたぐ、猫の手を教えるだけでこんな時間を使つとは思
わなんだ」

董「……ふう」

結那「どう？出来た？」

董「やつと…こんくら」

広裕「うん…こりやみじん切りになるのはこいつの田か…まあ、

進歩といえば進歩か

結那「広裕、暇ならチャーシューでも切つてて」

広裕「あいよー」

董「……で?」

結那「で、つて何?」

董「『広裕』君にどこまで迫つたわけ?」

結那「つ……痛つ……ああ、手切つちゃつた……」

董「どうしたの結那さん。もしかして動搖なさつてます? けつつけ」

結那「ど、動搖だなんて」

董「と言いつつも声が震えている結那さんなのであつた」

結那「な、なんのことをい、いつてるのか、か、さ、さつぱりなんだけど……」

董「またまた」「冗談を。大丈夫、私は那智君を奪つたりしないから」

結那「と、とつ……！」

広裕「おーい、結那。さいの日に切つといたぞ……つじどりした? 顔が赤いぞ?」

結那「に、にやんでもない!」

広裕「熱でもあるのか?」

結那「へ? あ、顔ちか……」

広裕「うーん、熱はないか……ま、いつか。おい結那、気分悪かつたら早めに言えよ」

結那「あ……うん」

広裕「さてフライパンフライパン……」

董「さて……額を突き合わせた感想はいかが?」

時子「あ、私も聞いていいかしら」

結那「えつ! ? ええつ! ?

董「そこまで照れなくてもいいんだよ?」

結那「て、照れてなんかない!」

広裕「おいお前ら、少しは働け。特に上市、元はお前のための料理

講座だらうが」

董「う……次は何をすればいいの？」
広裕「ともかくにもまずは仕事みじん切りだな」

から二分後

董「いよいよ炒めるの？」

結那「待って、まずは油を入れて少し熱しないと……よつと」

広裕「あれ、ご飯は解凍しなくて……つて、レンジで解凍してる」

時子「あ、いらないの片付け……もうやつてあるし……」

広裕「全く結那はおむつはあんまよくないくせにこいつう時は手際いいんだから……」

時子「那智君、それを言つなら『おむつ』じゃなくて『お・つ・む』よ」

結那「どっちにしろ馬鹿にされてる気がする……」

広裕「お、ご飯があつたまつたぞ」

結那「あ、そしたらこんなかに入れて……そうだ。もうひとつ口

ン口も空いてるし董もやる？」

董「ええつ……ど、どうすれば」

結那「まずは油をひいて、あ、大匙一杯くらいでいいからつて言つたそばから！」

董「えつ、何？」

結那「あーあ、入れ過ぎだつてば……」

広裕「うわ、本当だ。完全にひたひただな……揚げ物でも作る気か

？」

董「……そんなこと言われても……」

結那「とりあえず余分な油はその計量カップにでも入れといて。後で戻しておくから」

董「へーー」

結那「油きつたら火にかけて……あ、ちょうどいいや。私が作るから見てて。広裕、卵取つて！」

広裕「あいよ」

董「なんか気合いが入ってる……」

結那「まずは卵をひいて……半熟になつたらご飯を投入、と」

董「あれ、他の具は？」

結那「それはあとあと。投入したらとにかくかきませる……」

董「うわっ、かきませるの速つ！」

結那「そんなことないよ。あ、あんま近づかない方がいいかも。油撥ねるから」

董「うわっ、あつっ！」

結那「だから言つたのに……よつと」

董「なにこの中華の鉄人ばりの手捌き」

時子「炒飯が……舞つてる……」

董「あれテレビの幻像^{まやかし}だと思つてた……」

結那「へつ？ 慣れればたいしたことないよ？」

広裕「……、悪い、わからん」

結那「そう？……まあいや。大分炒^{いた}まつたし、残りも入れちゃえ？」

董「あれ、これで終^{いれ}わり？」

結那「うん、後は長葱^{ながね}が生じやなくなるまで炒めれば。簡単でしょ？」

董「無理無理！ ギブ！」

結那「そんなこと言わないの。料理は実践あるのみ。早速やつてみよー！」

広裕「おいおい、大丈夫なのかよ」

時子「大丈夫……つて何が？」

広裕「滑河さんも見てなかつた？ 上市^{あいつ}、『猫の手』もわからなかつたつうのに、火を使わせんのはちょっとな……いや、大分心配だ」

時子「私としては那智君の方が心配だけだ」

広裕「ん？ なんか言つた？」

時子「何にも」

結那「さてと、油はひいてあるからまずは火をつけて……あ、強火

でいいよ

董「もう『ご飯入れていい?』

結那「まだまだ。つていうか先に卵を入れるんだって」

董「あつ、そつか

結那「こつからには時間との勝負だから。ちよつと待つて……今！」

董「えつ、あつ、やつ

広裕「何やつてんだ上市。さつさとやらつてうわつー。何やつてんだ！ 誰も豪快に割れとは言つてないぞー！」

董「あつう……」

広裕「つたく……あ、結那はいいよ、俺が全部片づけておくから上市は隣のコンロ使つてろ。ああ、滑河さんもいいから。適当に上市をサポートしててくれ

時子「でも那智君は……」

広裕「俺のことは気にしなくてもいいって。…………んじょ、よしとれた」

結那「あ、洗面所は……」

広裕「大丈夫、場所くらいわかるつて

時子「あ……」

結那「……」

董「…………なんていうさ、小粹というかさ」

時子「痒いところに手が届くというか……ねえ？」

結那「え、あ、うん、そうだね……つてなんで私に訊くのー？」

董「や、別に？ ただ、結那の『彼氏』さんは甲斐甲斐しいなつて思つただけだけど

結那「か、か、彼氏！？ べ、別に広裕はそういう関係じや

董「あれ、あたし那智君の名前出した覚えないけどなあ？」

結那「あ、え、いや、その……」

董「あらり、赤くなつてら」

結那「うひ……」

勝子トハラ蓮、おわなべりす。えいり

董 あたご

広裕 おーい進んでるか…… さて何せでんだ上市

董「うえええん！ トッキーがデコピンしてきたあああー！」

「だからってふつからへるな！」つうかアジキーリ何だぬ
「行直の間、」

！新種の鳥か！？」

「…………多分暗子のことだと思ふ」
「…………」

つけっぱなしじゃないよな!?

結那「え、何のこと……って、ち

卷之二

広裕「早くー つまみをー 回すんだー。」

結那「い、い、いやよ！ 怖いもん！ ひ、広裕が行つてよ。」

広裕「ああそうしたいさ 上市がいなかつたらな！」

董ひーん、エッキーがあ.....」

広裕：まだ言つてない： ついでにか昇く湯せ！ 炎出でる

時子「那智君」

「何、急に改まつて」

時子「……任せた」

広裕「で俺に丸投げかよ！」

董「トッキーが！」

「廣裕、誰でもいいから消してくれ——つ！」

この後りは止めました

一週間後の昼：教室

広裕「……つていうことがあつてだな」

健興「へえ、おもしろいんじゃない？」

「広裕、そんな軽いもんじやなかつたぞ、あれは」

「勝彦、いいじゃんかよ。おめーの周りは女子がたくさんで」

広裕「やめとけ。少なくとも上市は危険だからやめとけ」

健児「そつ。董さんはおもしろい人だと思つけどなあ……」

広裕「そんな風に思つのはお前くらいだと黙つけどなあ……お、尊

をすれば影だ」

董「あ、健児君、は、はい、これ」

健児「お、ありがと。僕もうおなかペコペコだつたんだよ」

董「別にお礼なんて……わ、私がやりたくてやつたんだから。な、な、なんかあつたら言つたね？ んじや！」

広裕「めつちや慌ててどうしたんだ上市は……あれ、つかせつてお前飯は？」

健児「ん？ これだよこれ

広裕「お前、もしかして」

勝彦「愛妻弁当とかこうやつですかあー。 ヒロー ヒローー。」

広裕「えーと、猿轡さるのくわ」こいら辺にねえかなあ…… つてお前まさか弁当作つてもらつてるのかー？」

健児「うう。いつもは持つてくるんだけど董さんに『明日作つてくるから持つてこなくていいよ……てか持つてこないでお願い！』つてきつと言われたから」

広裕「うん、さらりと自慢ありがと」

健児「ん、どうかした？」

広裕「そして彼女持ちはこの余裕である ほら、勝彦があんな落ち込んでる」

勝彦「くわう…… なんで、なんでこんな奴にあんな素敵な彼女がいるんだあ！」

健児「へへ、照れちゃうな」

広裕「その余裕はどうから出でくるんだ…… それはそつと、上市の弁当とか、この前のこともあるし俺は心配でたまらん……」

勝彦「ひぐつ……あむつ、うぐつ……」

健児「どうなんだろ。さてと中身は、つと。お」

広裕「おおつ？ おおつ、おおつ、普通だ 見た目は

健児「そんなこと言っちゃダメだよ広裕。折角董さんが作ってくれたんだから。けなすのは僕が許さないよ」

広裕「いや、あの上市のことだから何が起きてても俺は驚かないぞ」

健児「やっぱり最初は卵焼きだよねー」

広裕「……（……向こうで上市が手を組んで震えてるのは『氣のせい』か？）」

健児「あむ……うん、おいしいよ。出汁が効いてて」

広裕「なん……だと……!? しかも出し巻きだと……!?」

健児「これはあれかな、豚の味噌漬けかな……うん、おいしい」

勝彦「ひぐつ……彼女おお……えぐつ」

広裕「……向こうで上市が喜んでるのは『氣のせい』だな、うん。って勝彦まだ泣いてるのかよ！」

健児「……」

【同時刻】

董「よかつた……本当によかつた……！」

結那「よしよし」

董「ありがとう結那ああああ！」

結那「うわっ、ちょ、ちょっと、飛びつかなくともいいじゃないの！」

董「こうでもしないとあたしの気が收まらないの！」

結那「私の気は休まらないんだけど……それでも董はすごいこと思つよ」

董「いやいや、あの後一週間も指導ティーチングしてくれた結那のおかげだよ」

結那「そのぐらい当たり前よ。そもそも董が私に『健児君に』一度董さんの弁当も食べてみたいなあ』って言われたんだけどどうしよう……』って泣きついたのが始まりなんだから

董「あれ、そうだけ？」

結那「そう。それに残りは董の努力だったんだからもつと自身持つてつて。あ、ほら、愛しの『彼』に感想を聞かなくていいの？」

董「……そんなの食べる姿を見てればわかるよ。これだから彼氏のいない連中の嫉妬は」

結那「なにが嫉妬よ」

董「ていうかー、ぶつちやけ結那の程の料理の腕があれば那智君なんていチコロじゃないの？」

結那「ぶふつ！ げほつ、げほつ、ほつ……いきなり何を言ひのよ

董！ 何度も言つてるけどあいつはただの幼馴染だつて！」

董「そんなに顔を赤くておいて？」

結那「う、うるさい……あむつ」

董「あらり、やけ食いに入っちゃつた……はあ、結那が那智君に特攻できるのはいつになるんだろうね、あむつ……明日は得意になつた炒飯を作つてみようかな」

以下ネタバレを含みます

バトルチックは和製英語ですが、意味は言わずもがな。前書きにも書きましたが全文が台詞でできています。はつきり言つてつらかつたです。台詞の中に周りの描写を入れないといけないので。ここまで読んでくれた人は気付いたでしょうが、実は四章で登場した永原健児と部員の上市董は彼氏彼女の関係なんです。驚いた？（ドナド的に）

本当はこの設定は後の方で出したかった（健児の影が薄いから）のですがこの話のネタを思いついた時に「ついでにいれちゃえ」と決意。料理教室をやる理由ができました。このカップルは研修旅行がメインとなる本編ではあまり出す機会がないので、後日短編の方でデータ編とか告白編とか二人の関係を書いていきたいと思います。現在パソコンが使えないため更新が遅れています。もうじき本編の第七章があがる予定です。それでは次のお話で皆さんに会えるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6832q/>

School Days on Rail ~みんな乗る気です！

2011年11月13日07時04分発行